

Proposition 0.0.1

A を空間とし、 $n \geq 1$ で n 次元の胞体 e_λ^n を A に貼り付けた空間を X とする。つまり、

$$\varphi_\lambda : S_\lambda^{n-1} \longrightarrow A$$

に対し、 $X = A \cup_{\varphi_\lambda} \left(\coprod_{\lambda \in \Lambda} D_\lambda^n \right)$ とする。このとき、 (X, A) は $n-1$ 連結である。

proof) $1 \leq k \leq n-1$ に対し、任意の連続写像 $f : (D^k, S^{k-1}) \longrightarrow (X, A)$ に対し、

$$\exists g : D^k \longrightarrow A \quad s.t. \quad g \simeq f \quad \text{rel } S^{k-1}$$

を示せばよい。とりあえず、 $f : (I^k, \partial I^k) \longrightarrow (X, A)$ と考えておく。 $f(I^k) : \text{compact}$ により、

$$\exists \lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_m \in \Lambda \quad s.t. \quad f(I^k) \subset A \cup \left(\coprod_{i=1}^m D_{\lambda_i}^n \right)$$

であるため、各 $D_{\lambda_i}^n$ の原点 0 を除き、

$$U = A \cup \left(\coprod_{i=1}^m (D_{\lambda_i}^n - 0) \right)$$

とおくと、これは X の開集合である。また、 φ_{λ_i} による胞体 e_i も開集合であるから、 $f(I^k)$ の有限開被覆として、

$$f(I^k) \subset U \cup e_1 \cup e_2 \cup \dots \cup e_m$$

がとれる。ここで、 I^k を十分小さく n 次元cube に分割し、各 cube の像が U または e_i に含まれるようにできる。正確には、

$$I^k = I_1 \times I_2 \times \dots \times I_k \quad (I_i \text{ は } I \text{ のコピー})$$

とすると、各 $1 \leq i \leq k$ に対し I_i の分割、

$$0 = t_{i_0} < t_{i_1} < \dots < t_{i_s} = 1$$

が存在し、 $i_0 \leq j_i \leq i_s$ に対し、 k 個の番号 j_i ($1 \leq i \leq k$) で決まる n cube を

$$J = [t_{1_{j_1}}, t_{1_{j_1}+1}] \times [t_{2_{j_2}}, t_{2_{j_2}+1}] \times \dots \times [t_{k_{j_k}}, t_{k_{j_k}+1}]$$

とおくと、各 J に対し、 $f(J) \subset U$ または、 $f(J) \subset e_i$ となる。このような J のうち、 $f(J) \subset U$ となるものの和集合を K 、 $f(J) \subset e_i$ となるものの和集合を L_i とおく。上記の分割が I^k の胞体分割を与えるため、 K, L_i は I^k の部分複体である。

$$f|_{L_i} : (L_i, L_i \cap K) \longrightarrow (e_i, e_i - 0)$$

であり、

$$\pi_m(e_i, e_i - 0) \cong \pi_m(\text{Int}D^n, \text{Int}D^n - 0) \cong \pi_{m-1}(\text{Int}D^n - 0) \cong \pi_{m-1}(S^{n-1})$$

であるから、 $m \leq n - 1$ に対し、 $\pi_m(e_i, e_i - 0) = 0$ 。また、 $\dim L_i = k \leq n - 1$ なので、

$$\exists f_i : L_i \longrightarrow e_i - 0 \quad \text{s.t.} \quad f \simeq f_i \quad \text{rel } L_i \cap K$$

よって、

$$f' = f|_K \cup (\cup f_i) : I^k \longrightarrow U$$

が定義できるが、これは、 $\partial I^k \subset A \subset K$ であるため、 $f \simeq f' \quad \text{rel } \partial I^k$ さらに、 U は A の強変位 retract であるので、その retraction を r すれば、

$$g = r \circ f' : I^k \longrightarrow A$$

が構成できて、 $f \simeq g \quad \text{rel } \partial I^k$ となる。 (D^k, S^{k-1}) で考えれば、 $g : D^k \longrightarrow A$ で、 $f \simeq g \quad \text{rel } \partial S^{k-1}$ を満たすことになる。

Corollary 0.0.2

(X, A) を CW pair とすれば、 $n \geq 0$ に対し、 $(X, \bar{X}^{(n)})$ は n 連結である。

proof) $m > n$ に対し、 $(\bar{X}^{(m)}, \bar{X}^{(n)})$ が n 連結であることを m に関する帰納法で示す。 $m = n + 1$ のときは、 $\bar{X}^{(n+1)}$ が $\bar{X}^{(n)}$ に $n + 1$ cell を貼り付けた空間であるため、Prop 0.0.1 により成立。ここで、 $m > n$ に対し、 $(\bar{X}^{(m)}, \bar{X}^{(n)})$ が n 連結であったと仮定する。 $(\bar{X}^{(m+1)}, \bar{X}^{(m)}, \bar{X}^{(n)})$ ホモトピー完全列を考えると、

$$\pi_i(\bar{X}^{(m)}, \bar{X}^{(n)}) \longrightarrow \pi_i(\bar{X}^{(m+1)}, \bar{X}^{(n)}) \longrightarrow \pi_i(\bar{X}^{(m+1)}, \bar{X}^{(m)})$$

が完全になるため、 $i \geq n$ に対し、 $\pi_i(\bar{X}^{(m)}, \bar{X}^{(n)}) = \pi_i(\bar{X}^{(m+1)}, \bar{X}^{(n)}) = 0$ なので、 $\pi_i(\bar{X}^{(m+1)}, \bar{X}^{(n)}) = 0$ となり、 $(\bar{X}^{(m+1)}, \bar{X}^{(n)})$ が、 n 連結となる。よって、 $i \geq n$ に対し、

$$0 = \pi_i(\bar{X}^{(m)}, \bar{X}^{(n)}) = \pi_i(\bar{X}^{(n+1)}, \bar{X}^{(n)}) = \pi_i(\bar{X}^{(n+2)}, \bar{X}^{(n)}) = \cdots = \pi_i(X, \bar{X}^{(n)})$$

が sequential colimit と homotopy 群の可換性からわかる。よって、 $(X, \overline{X}^{(n)})$ は n 連結である。

Lemma 0.0.3

X, Y は CW 複体とし、 $r \geq 0$ に対し、 $f_r : X \rightarrow Y$ は、 $f_r \simeq f_{r+1} \text{ rel } X^{(r)}$ であるとする。このとき、

$$f_\infty = \cup f_r|_{X^{(r)}} : X \rightarrow Y$$

は連続であり、 $f_\infty \simeq f_0$

proof) f_∞ が連続であることはわかる。 $f_r \simeq f_{r+1}$ の homotopy を、

$$H_r : X \times I \rightarrow Y$$

とおく。 $H : X \times I \rightarrow Y$ を次で定義する。

$$H(x, t) = H_r(x, (r+2)(1 - (r+1)t)) \quad \left(\frac{1}{r+2} \leq t \leq \frac{1}{r+1} \right)$$

$$H(x, 0) = f_\infty(x)$$

$X \times I$ は CW 複体であり、 $(X \times I)^{(r)} = X^{(r)} \times \partial I \cup X^{(r-1)} \times (0, 1)$ であるため、 H は各 $(X \times I)^{(r)}$ 上で連続なので、 H が連続となる。

Theorem 0.0.4 胞体近似定理

$(X, A), (Y, B)$ を CW pair とし、連続写像

$$f : (X, A) \rightarrow (Y, B)$$

は、 X の部分複体 Z 上で胞対写像であるとする。このとき、

$$g : (X, A) \rightarrow (Y, B)$$

が胞体写像で、 $f \simeq g \text{ rel } Z$ となるものが存在する。

proof) $k \geq -1$ に関して、 $f_k : X \rightarrow Y$ で、 $\overline{X}^{(k)} \cup Z$ 上で胞体写像であり、 $f_k \simeq f_{k-1} \text{ rel } \overline{X}^{(k-1)} \cup Z$ であるものが存在することを帰納的に示していく。 $f_{-1} = f$

とおけば、 $A \cup Z$ 上で胞体写像は間違いない。よって、 $-1 \leq k \leq n-1$ まで条件を満たす写像 f_k が与えられたとする。

$$f_{n-1} : X \longrightarrow Y$$

に注目すれば、 $\bar{X}^{(n-1)} \cup Z$ 上では胞体写像ということで、

$$f_{n-1} : (\bar{X}^{(n)}, \bar{X}^{(n-1)} \cup (\bar{X}^{(n)} \cap Z)) \longrightarrow (Y, \bar{Y}^{(n)})$$

と考え、 $(Y, \bar{Y}^{(n)})$ が Cor. 0.0.2 により、 n 連結で、 $\bar{X}^{(n)} - \bar{X}^{(n-1)} \cup (\bar{X}^{(n)} \cap Z)$ に含まれる cell の次元は n であるため、

$$\exists g : \bar{X}^{(n)} \longrightarrow \bar{Y}^{(n)} \quad s.t. \quad g \simeq f_{n-1} \quad \text{rel} \quad \bar{X}^{(n-1)} \cup (\bar{X}^{(n)} \cap Z)$$

この homotopy を $H : \bar{X}^{(n)} \times I \longrightarrow Y$ とする。また、 $G : Z \times I \longrightarrow Y$ を $G(z, t) = f_{n-1}(z)$ で定義すると、

$$F = H \cup G : \bar{X}^{(n)} \cup Z \times I \longrightarrow Y$$

が定義できる。 $F_0 = f_{n-1}, F_1 = g$ である。ここで、次の可換図式、

$$\begin{array}{ccc} \bar{X}^{(n)} \cup Z & \longrightarrow & \bar{X}^{(n)} \cup Z \times I \\ \downarrow & \nearrow F & \downarrow \\ X & \longrightarrow & X \times I \end{array}$$

において、HEP を用いて、

$$\begin{array}{ccc} \bar{X}^{(n)} \cup Z & \longrightarrow & \bar{X}^{(n)} \cup Z \times I \\ \downarrow & \nearrow F & \downarrow \\ X & \longrightarrow & X \times I \end{array}$$

が存在するわけだが、 $f_n = \tilde{F}_1 : X \longrightarrow Y$ とおくと、 $(x, t) \in \bar{X}^{(n-1)} \cup Z$ に対し、

$$\tilde{F}(x, t) = F(x, t) = H \cup G(x, t) = f_{n-1}(x)$$

であるため、

$$f_n \simeq f_{n-1} \quad \text{rel} \quad \overline{X}^{(n-1)} \cup Z$$

であり、 $m \geq n$ に対し、

$$f_n((\overline{X}^{(n)} \cup Z) \cap \overline{X}^{(m)}) \subset g \cup f_{n-1}(\overline{X}^{(n)} \cup ((\overline{X}^{(n-1)} \cup Z) \cap \overline{X}^{(m)})) \subset \overline{Y}^{(n)} \cup \overline{Y}^{(m)} = \overline{Y}^{(m)}$$

であるため、 f_n が $\overline{X}^{(n)} \cup Z$ 上で胞体写像であることがわかる。これより、

$$g = f_\infty = \cup f_n|_{\overline{X}^{(n)}} : (X, A) \longrightarrow (Y, B)$$

が求める写像である。

Corollary 0.0.5

X, Y を CW 複体とし、 $f : X \longrightarrow Y$ を任意の連続写像とすると、胞体写像 $g : X \longrightarrow Y$ で $f \simeq g$ となるものが存在する。